

受験生の成長を促すAO入試が 高大の教育接続の機能を発揮



京都工芸繊維大学アドミッションセンター准教授

山本 以和子

やまもと・いわこ

名古屋大学大学院教育発達科学研究科修了。信州大学経済学部助手、民間教育系企業を経て2009年から現職。高等教育学、主に高大接続や初年次教育の制度・戦略を研究。大学コンソーシアム京都高大連携研究協議会委員。

京都工芸繊維大学は、教科別試験を課さないAO入試「ダビンチ入試」を実施している。受験までの状況の把握とスクーリングを通して基礎学力を含む能力や適性を多面的に評価するこの入試は、大学での学びのビジョンを明確にする教育プログラムとしても機能しているという。高大接続に対する考えと、特色あるAO入試の概要について山本准教授に聞いた。

大学の学びの姿勢に 変えられない学生

高校と大学の学びは異質なものである。高校までは、系統的学習を通して知識を得て、正解ありきの状況下で解答する。一方、大学では、知識を融合的に用いて、正解のない現実的な状況下で最適解を導く能力の育成に力が注がれる。高校と大学のこうした違いを学習者がきちんと認識し、学びに対する姿勢を自ら変えることが期待されるが、現在の日本では大学教育を高校の延長のように捉えている学生が多い。

国内外の高大接続モデルには、次のようなものがある。第1モデルは従来の教科型入試で、選抜するモデルである。第2モデルは、大学が高校で基礎的な大学レベルの教育を実施し、大学の単位を与えるシステムである*1。第3モデルは、関係教育組織でリメディアル教育を実施し、所定の単位を修得

*1 例えば ADVANCED PLACEMENT など。

した者を大学に移行入学させるシステムである。第4モデルとして、大学の教育成果重視の接続モデルがある。博士の学位取得要件から逆算して学士課程への入学要件を定め、それを満たせば大学教育を受ける準備があるとして、入学を認める制度だ。本学ではこの第4モデルを参考に、大学で学ぶマインドがセットされているかを問うダビンチ入試を実施している。

資格などのスペックより 姿勢や創意性を重視

本学で行っている入学前から入学後にかけての学習パフォーマンスの追跡調査では、選抜方法によらず入学直後から学業不振者が確認され、この時点の「学習のつまずき」がその後もずっと尾を引くことが判明している。これは、学生の学習観が高校生のそれから脱却しないため、能動的な学習態度や意欲

に結びつかないためだと考えられる。

そこで本学では、大学教育を受ける準備が高校生活の中で培われたかを問うダビンチ入試を2002年度から導入し、効果を上げている。この入試では、教科別試験は行わず、調査書などの提出書類と、本学での授業を模した講義を受けるなど2回のスクーリングの結果を総合し、能力や適性を多面的に評価する。「高校で成果を上げた生徒は、大学入学後も成果が期待できる」という方向性で選抜を行っている。

この選抜では在学中に取った資格や特別な活動の結果が可否に関係するとよくいわれるが、そういうスペックだけでは決して評価をしない。高校生なので、SSH指定校で学んでいるなど、ほとんどが与えられた環境下での成果だからだ。結果ではなく、そのプロセスや問題意識、解決のしかたなどの文脈を注視し、入学後もそれが期待できるかを評価する。結果に至る模索の中で、そ

れが自分にどのような変化をもたらしたか、そういうストーリーを持っている生徒が、大学教育で向上できる。

ダビンチ入試による入学者には、任意で入学前教育を課している。その効果もあると思われ、中退率が低く、成績もトップ層を形成する場合がある。また、学生フォーミュラなどのプロジェクトリーダーを務める学生も多い。

ダビンチ入試がめざすのは、「受け

てよかった入試」である。試験後に行う調査では、「模擬講義が体験入学のようで楽しく、同じ志を持つ人と話すうちに、この大学への気持ちが強くなった」など、進学意欲の高まりを示す感想が多く寄せられる。この入試で不合格になっても、一般入試を受け直したり、次年度に再挑戦したりする受験生も少なくない。リベンジ組が多いのも、この入試の特長だ。

大学に来て学びたいと思えるような講義を行い、課題では、ステイブ・ジョブズ氏のスピーチのように学ぶ意欲や目的意識を高めるメッセージに触れさせるなど、この入試自体を1つの教育プログラムと位置付けている。もし不合格になっても、他大学に進学しても、この入試を経験したことによって、大学生マインドが育成される、そんな教育的な機能をめざしている。(談)

実践

学ぶ準備ができているか、多面的に評価

——京都工芸繊維大学のダビンチ入試

ダビンチ入試は、教科別試験は課さず、2段階の選考（スクーリング）を行う。第1次選考では京都工芸繊維大学で学ぶ準備ができているかを、第2次選考では各課程で学ぶ力があるかをみる*2。

第1次選考は、講義とレポート、文章課題とレポートという2段階で行われる。レポートを通して基礎学力を確認し、文章の読解力や表現力を測定するほか、受講時の理解・応用力なども評価する。その結果と提出書類の内容を総合して選抜する。

課程ごとに実施する第2次選考では、講義や実験など、各課程で行われている

学びの一端を切り取った形でのスクーリングを行い、レポート、プレゼンテーション、グループディスカッション、面接などを行う（図表）。各課程が求める人材か、学習のしかたに耐えられるかを考察することにより、その課程での学習効果が十分に期待できるかを判断する。

ダビンチ入試の合格者には、入学までの期間も学習習慣を維持できるよう、主体的な学習者を育成するための入学前教育を実施している。

12月初旬の合格発表後にオリエンテーションを行い、通信添削や学習相談会がスタートする。通信添削は、英語、

数学、物理、文章表現について、各教科3回全12回の課題を提出させる。テキストは大学での学びに必要な内容を盛り込んだオリジナル教材で、1日1時間程度の勉強が前提だ。

「入学後の成績は、出身高校の偏差値や合格直後のプレースメントテストの成績より、入学前教育の課題の提出率と一番強い相関関係を示している。課題提出率は、ここ数年はほぼ100%だ」（山本准教授）。

学習相談会は3回実施する。自学自習がメインだが、ミニ講義や学生チューター等のオプションもある。2013年度は合格者59人中、1回目54人、2回目55人、3回目47人が参加、京都以外からの参加者も多い。

入学予定者に送るメールマガジンには、通信添削のヒントのほか、先輩学生からのメッセージなど、高校生から大学生への転換を促す内容を盛り込み、大学への帰属意識の醸成や、自主的に学習する姿勢の維持・向上に力を注ぐ。

第2次選考試験の例 ～2014年度デザイン経営工学課程の問題～

1 目 目	課題&プレゼン	「3種類の色を用いることでより役に立つモノのアイデアを考え、文章、絵、図表等を用いて提案する」という課題の下で資料を作成し、受験者全員の前でプレゼン、質疑応答
2 目 目	グループディスカッション	「景観について京都やヨーロッパの事例を含めた講義の受講後、「京都の景観のあるべき姿」について、グループディスカッションし、結果を口頭で発表
	面接	志望理由、勉学の方向性、学習意欲や将来の展望について質問

*2 京都工芸繊維大学の学生募集は、学部・学科単位ではなく課程単位で実施されている。